

# 環境共生研究所によるオープンカレッジ講座の成果と課題

秋本 弘章

## 1. はじめに

獨協大学環境共生研究所は、環境と共生する持続可能な社会の創生に関して、環境共生社会の形成手法と環境共生社会形成のためのパラダイムの研究という2つを主な課題として調査・研究をおこない、本学および社会における環境に関する調査・研究・教育に寄与することを目的としている（犬井, 2008）。このうち環境共生社会形成のためのパラダイムに関する研究に関して、環境教育プログラム開発プロジェクトを行っており、その実践・実証的研究の一環として、学部教育の全学総合カリキュラムと社会人向けのオープンカレッジに授業科目を提供してきた。全学総合カリキュラムにおいて実施してきた講義の一端は、浜本光紹監修・獨協大学環境共生研究所編「環境学への誘い」ですでに公にされている。本稿は、オープンカレッジで開講してきた「地域の環境を考える」の内容を紹介するとともに、その成果と課題について検討するものである。

オープンカレッジとは、一般には公開講座ともいわれる大学の提供する生涯学習講座の総称である。大学のもつ教育・研究資源を地域に還元するものであり、社会人のリカレント教育の役割を果たしている。地方公共団体や民間企業などでも社会人向けの講座が開設されているが、大学の開設する公開講座は大学での研究・教育をバックボーンに持つという違いがある。

本学においては、1970年に埼玉県・草加市・越谷市などの自治体と連携しながら公開講座を開講した。その後講演会形式の「市民文化講座」と講義形式の「市民教室」をスタートさせ、1994年にそれらを「オープンカレッジ」と名称統一した。（獨協大学五十年史編集委員会 2016）。現在、講演会形式の「特別講座」を年2回開催し、通常の講義形式で行われる「一般講座」は4分野、外国語講座は9言語にわたり100以上

の講座を提供している。

18歳人口の減少が確実にある現在、大学における教育は高校卒業生だけを対象としたものでは成り立たなくなることが予測される。したがって、大学における教育研究機能を維持発展させていこうとするならば、社会人向けの講座であるオープンカレッジは重要な意義を持つものとなろう。

## 2. オープンカレッジ講座の特色

通常の大学の講義は学問分野の体系的なカリキュラムに基づいている。例えば、経済学を学ぶ場合、ミクロ経済学、マクロ経済学といった基礎科目を学んだうえで、さまざまな専門科目を学ぶ。基本的なカリキュラム体系はどの大学で学んだとしても大きな差はない。

オープンカレッジにおいては、語学講座などでは、初級・中級・上級といった一定のカリキュラムを持つものもあるが、通常は、一連の講義で完結ものとされ、事前事後の学習体系を有していない。講座内容は担当する教員にゆだねられており、極めて自由度が高い講義を展開することが可能である。ただし、オープンカレッジの受講に際しては、特段の受講資格はないため、講師は、受講生の実態を踏まえて講座内容や方法を工夫する必要がある。

その講座内容を全学総合講座として提供された環境学と、オープンカレッジの講座とで比較してみよう。

第1表は全学総合科目として提供した環境学Ⅰおよび環境学Ⅱの授業内容（2008年度）である。<sup>1)</sup> 各学部において環境に関する専門科目が提供されている。経済学部の環境経済学、環境政策論、法学部の環境法などである。環境に関する研究を行う場合、自然科学的理解は不可欠である。しかしながら各学部においては、環境に関する基礎科目は開設されていない。また、本学学生は、高等学校において、地学や生物、地理など

の環境に関する科目を必ずしも履修しているわけではなく、自然科学的基礎学習は不十分である。環境学Ⅰはそうした状況を補うものとして企画された。また、環境学Ⅱでは地球環境問題の現状を概観したのち、環

境共生研究所の研究員等が取り組んでいる研究を紹介することで、大学専門課程での教育・研究への橋渡しを目的としている。

第1表 全学総合カリキュラム環境学Ⅰ、Ⅱの授業内容

環境学Ⅰ（春期）

回数	②タイトル	③サブタイトル
1	環境とは何か	
2	最近の地質時代の環境変動	
3	地球規模の水循環	
4	平野の形成	海水面変化と地盤運動
5	大気の大循環と世界の気候	
6	土壌の生成と人為的改変	
7	植物とエネルギー循環	
8	植物分布と地理的環境(1)	
9	植物分布と地理的環境(2)	
10	植物と動物	
11	人類と環境(1)	人類社会と環境の意味
12	人類と環境(2)	農業農村の社会と環境
13	人類と環境(3)	都市の社会と環境

環境学Ⅱ（秋期）

回数	②タイトル	③サブタイトル
1	地球環境問題とは	雑木林と世界
2	地球・地域環境問題	人口と食料
3	地球・地域環境問題	酸性雨
4	地球・地域環境問題	熱帯林の破壊
5	地球・地域環境問題	地球温暖化
6	地球・地域環境問題への対応	企業活動
7	地球・地域環境問題への対応	環境経済・環境行政
8	地球・地域環境問題への対応	国際社会
9	地球・地域環境問題への対応	環境と法
10	地球・地域環境問題への対応	環境教育
11	地球・地域環境問題への取り組み	ナショナルトラスト
12	地球・地域環境問題への取り組み	佐渡、トキ放鳥をめぐる
13	地球・地域環境問題への取り組み	草加の環境対策

第2表は2008年度のオープンカレッジの講座内容である。身近な題材をテーマにしながら「環境」に関する考察を深めることを意図している。

春期は「緑」をテーマとしている。保存樹木や「ふるさとの森」といった古くからの直地空間、都市公園や団地、学校などの作られた緑地空間、そして農地といった生産緑地について身近にある具体的な場所を示しながらその意義について検討した。秋期は「水辺空間」をテーマとしている。埼玉県東部地域は、低地に

あって河川や農業用水路、排水路などが縦横にはしっている。水が、豊かな自然と産業・文化を育ててきた。一方で大きな災害をも引き起こしてきた。「水辺空間」の現状を観察し、安全・安心の街づくりについて考えることとした。特徴としては草加市およびその周辺を具体的に扱っていることにある。すなわち生活者としての場所に関する知識を講座の前提としている。

第2表 オープンカレッジの講義内容（2008年）

身の回りの緑を見つめなおそう（春期）

回	テーマ
1	地図で見る草加市の変遷 昭和22年頃、昭和44年頃、現在
2	緑のまちづくり 草加市みどりの条例の役割
3	ふるさとの緑 保存樹木、ふるさとの森（屋敷林）の役割
4	作り出す緑 団地や公園、学校の緑とその思想
5	生産の緑 農地の保全と都市の農地 生産緑地を訪ねる
6	緑のまちづくりにむけて ヨーロッパの街並み、都市における緑の価値

水辺空間をみつめて（秋期）

回	テーマ
1	埼玉県東部地域の成り立ち 水との関わりから
2,3	草加・越谷周辺の水辺空間をめぐる（一日巡検）
4	水辺の記憶1 水郷と米のつくり
5	水辺の記憶2 水辺の動植物たち
6	水辺空間と環境問題1 綾瀬川はなぜ日本一汚い川になったのか
7	水辺空間と環境問題2 水害への対応
8	水辺空間とまちづくりにむけて 世界の水の都

学生向け講義と社会人向け講義の内容の違いは対象者の「経験」による。すなわち学生と社会人と比較すると、学生は人生経験が少なく、知識量も限られている。したがって大学の正規の授業では『知らないことをどのように伝えるか』ということに重点がおかれる。一方、社会人は十分な社会経験を積み、知識量も少ない人が多い。ただ、経験的知識は体系化されたものではない。つまり、彼らの経験的知識を、学問的につなぎあわせることでより深い理解につなげていくことができると考えている。すなわち、オープンカレッジでは、諸学問の体系を「教科書的」に講義するものではなく、様々なトピックを基に、それらの背景を具体的に説明していくことで、新たな「世界観」へいざなっていくことに重点が置かれているといえよう。

### 3. 環境共生研究所提供講座のテーマと内容

#### (1) 2008年度から2011年度

環境共生研究所提供のオープンカレッジは、環境共生研究所の設置目的から、開設2年目の2008年に開講された。コーディネーターは秋本が務めたものの、所長であった犬井の研究のバックボーンを基に構成された。

2008年についての内容はすでに記した。環境共生研究所の研究員は草加市審議会等の委員を務めていることが多く、市とのつながりが深い。そのため講義の一部に市の担当者を講師として招いている。そのほかの講座の担当講師は、環境共生研究所の研究員であった犬井（経済学部教授・地理学）、加藤（国際教養学部教授・生物学）、大竹（環境共生研究所特任助手・地理学）と秋本（経済学部准教授・地理教育、社会科教育）が務めている。<sup>2)</sup>

2009年春期はグリーンツーリズム・エコツーリズムをテーマとした。秋本は明治・大正期に活躍した田山花袋の『東京近郊一日の行楽』を取り上げた。田山花袋は安行などを散策しており、氏の文章を基に安行地区の景観について考察をした。また、安行地区のフィールドワークを実施して、その現状をとらえることとした。その一部は秋本（2009）で報告し犬井は直接かわって来た三富新田や名栗溪谷の事例を紹介してい

る。名栗の事例は、『エコツーリズム ころ躍る里山の旅－飯能エコツーリズムに学ぶ』（犬井 2017）として上梓された。また、草加市担当者は姉妹都市（福島県昭和村）との交流事業の紹介を行った。なお、草加市担当者に講師を依頼したのはこの回までで、以降は原則として本学教員が講師を務めている。

秋期は「衣食住」から環境をとらえるものとした。地域の風土に根ざした伝統衣料やわたくしたちの食卓、そして伝統的家屋と現在のエコ住宅について検討するとともに、フィールドワークではこれも犬井が長年研究の対象としてきた清瀬の農家を訪ねた。

2010年春期は「食と農」をテーマとした。これは、犬井や大竹の研究のテーマが農業・農村地理学であることから、その研究にも基づいた知見を提供するものである。フィールドワークでは、宮代町の農業公園『新しい村』と農産物直売所を訪問した。

秋期は「地図に見る環境」をテーマとした。担当講師はいずれも「地理学」を専門としており、地形図は研究のツールとしても活用している。地域情報の宝庫である地図を読解しながら地域の環境を見つめていこうとするものである。フィールドワークとして、国指定の史跡である見沼通船堀界隈を歩いた。なお本講座と同様の内容を埼玉県民活動センターでの市民講座にも提供した。

2011年度は、春・秋講座は日本各地の人と環境とのかわりについて取り上げた。北海道十勝地域や東京都小笠原地区、白神山地地域など犬井や大竹がゼミ合宿等を通じて学生とともに研究してきた地域を取り上げている。フィールドワークは、春期は東京都江東区、秋期は川越を巡った。

#### (2) 2012年度から2017年度

2012年に犬井が学長に就任したこともあり、オープンカレッジの講師からはずれることとなった。そのため、バックボーンとなる教育研究は、秋本・大竹<sup>3)</sup>にゆだねられることとなった。秋本の研究の軸は「社会科教育・地理教育」にあったことから講座の内容に変化が生じている。すなわち、学校教育で扱われる教材、とりわけ地域教材を基にしながら、社会人向けに

再構成した内容となってきた。

2012年は東京を中心とした自然的基盤を扱った。春期は台地（山の手）と下町（低地）の形成過程を踏まえつつ、地形的・地質的な違いを述べ、人間がどのように活用してきたかなどを明らかにした。秋期は東京湾をテーマにした。東京湾の水産資源や埋め立て地の特性などを扱っている。春期は所沢周辺をフィールドとして「トトロの森」の変化を見てきた。秋期は、汐留やお台場地区をまわり、埋立地の機能や変容を観察した。これらの内容は秋本が前任校（東京学芸大学附属高校）在職中から授業の中で扱ってきたものであるが、社会人向け講座として再編するにあたって、永井荷風の『日和下駄』などを教材とするなどの工夫を行っている。

2013年度は産業活動について扱った。春期は埼玉県内の伝統産業について地域的な視点から扱うこととし、フィールドワークでは「足袋の街」として知られた行田市を訪れた。秋期は、産業と環境、特に公害問題などを扱い、フィールドワークでは足尾鉍毒事件のゆかりの場所として渡良瀬遊水地を巡った。

2014年度は「身近な街道をゆく」というテーマで、春期は日光街道、秋期は中山道の埼玉県内の宿場町を中心に扱った。フィールドワークは、春期は草加から越ヶ谷を、秋期は鴻巣を歩き、その歴史を探訪した。

2015年度は河川と水辺空間を巡った。春期は埼玉県東部地区を流れる中川、綾瀬川、元荒川などの河川の特徴や流域の諸相を見、河川流域の植物や文化、保全と開発を扱った。春期のフィールドワークは綾瀬川の周辺を歩き河川環境の改善について考えた。秋期は吉川市を訪れ川魚の食文化について学ぶものとした。

2016年度春期は、身近な地域の諸相を「地図」として表現する実習を行った。観光地図やハザードマップなど地図は様々に使われているが、実際に作ってみようという試みで従来の講義を中心とした講座とは異なるタイプのものである。秋期は、東京を題材として、地域環境の変容を扱った。フィールドワークでは浅草界隈を歩き、江戸から現在までの変容を観察した。

2017年度春期は、「都電」をテーマとした。獨協大学の中庭には都電の敷石が使われていること、草加の

電力供給の始まりは「都電」の付帯事業であったことなどから、テーマ選定した。フィールドワークで実際に都電に乗り、三ノ輪橋および王子界隈を散策した。秋期は、「身近な地域の産業」をテーマとした。後半では浅井特任助手を講師として「ごみ処理」の問題についての考察を行っている。なお、フィールドワークでは、草加市内の工業団地を回り、地球儀制作で有名な「渡辺教具製作所」を訪ねた。

2018年度は「東京の地形と街並み」をテーマにした。受講生には、東京に勤務していた方も多く、東京も身近な地域としてとらえているようである。かつての勤務先周辺が話題に上がることが興味・関心を高めているようである。春期は下町低地と臨海部、秋期は台地を扱っている。フィールドワークでは春期は築地界隈、秋期は等々力溪谷を歩いた。

### （3）2019年度

2017年度から秋本はエクステンションセンター長を務めることとなり、2018年度からコーディネーターは大竹が務めるようになった。ただ2018年度の企画は秋本が行ったので、2019年度からが大竹が主体となった企画となる。春期は、「公園」をテーマとした。都市空間の中で公園の果たす役割は大きい、それについて学んでいこうというものである。日本の公園の父とよばれているのは埼玉県出身の本多静六博士であることから、郷土学習としての意味も持っている。秋期は、「都市地域」「里山地域」「奥山地域」の「自然と人間生活」のかかわりについて検討した。なお、この年から岡村（外国語学部教授・ドイツ環境政策）<sup>2)</sup>にも講師に加わっていただき、ヨーロッパの事情についても比較検討を行った。また、本学職員にも協力していただいて獨協大学で植栽している植物を使ったワークショップ（ラベンダースティックづくり、クリスマスリースづくり）も実施した。

### （4）2020年度～2021年度

2020年度はコロナ禍の影響で大学自体が閉鎖された。通常の授業はオンラインによって実施されたが、オープンカレッジは開講できない状況になった。こうした



中で、オンライン講座の実施も模索された。エクステンションセンター長であった秋本がエクステンションセンター職員と共同で「生涯学習の楽しみー地理・地名・地域文字を例としてー」としたオンライン体験講座を実施した。環境共生研究所の提供講座としては中止を余儀なくされた。

#### (5) 2022年以降

2022年度、大学の閉鎖が解除されると、オープンカレッジも再開された。2022年度春期は「地産地消」をテーマとして行い、地元の農家を訪問した。秋期は身近な観光をテーマとした。この年から鈴木（外国語学部教授・観光学）、大坪（経済学部教授・会計学）<sup>2)</sup>が講師に加わった。2022年度秋期以降再びコーディネーターを勤めるようになった。

2023年度は、武蔵野線沿線および東武スカイツリーライン周辺の地域変容についての講義を行った。武蔵野線は開業60年という年であり、東武スカイツリーラインにおいては松原団地駅（現：獨協大学前〈草加松原〉駅）が開業して61年にあたっている。受講者の多くは同じ時代を生きてきたこともあって、自らの人生をも振り返るきっかけとなったようである。フィールドワークとしては、春期は浦和美園地区、秋期は浅草周辺を巡った。

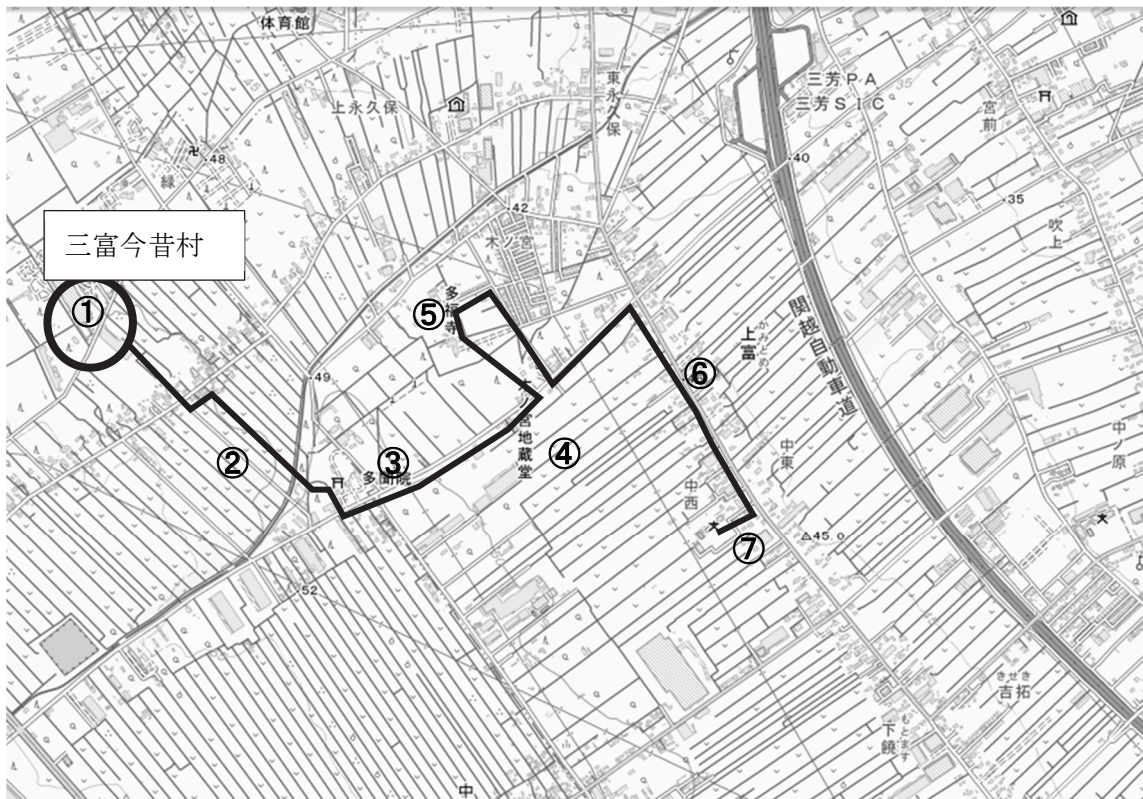
2024年度春期は、犬井の研究フィールドである三富

新田が世界農業遺産に指定されたこともあって、埼玉県にある無形文化遺産や灌漑施設遺産など世界的に認定された「遺産」を扱った。犬井はすでに退職し、名誉教授となっていたが、ゲスト講師を務めた。フィールドワークは三富新田を犬井の案内で回った。この講義は、3月に行われた特別講座と連動したものである。また、秋期は東武スカイツリーラインと直通する日比谷線の全線開通から60年ということもあり、日比谷線沿線地域の変貌を扱い、日本橋兜町周辺の野外観察を行った。

#### (6) フィールドワーク

本講座は開設当初からフィールドワークを実施してきた。現地観察により講義内容の理解を深めることができるとともに、地域の課題などについても考えることができる。受講生の評価も高い学習活動である。現地集合・解散で行っているが、いずれもバスや鉄道など公共交通機関等を使つての移動が可能である場所で設定している。

具体的な事例として2024年春期の事例を示す。2023年、「武蔵野の落ち葉堆肥農法」が世界農業遺産に登録された。これに直接かかわってきた犬井を講師として三富新田を巡った。第1図は具体的な見学コースである。



第1図 三富新田フィールドワークコース

集合場所：東武東上線「ふじみ野駅」

見学場所：

- ① 三富今昔村 この施設は石坂産業が経営する環境教育施設である。石坂産業はいわゆる産廃業者であるが、資源の再生・保全に力を入れている。かつて不法投棄が繰り返された場所を再生したものである。なお、石坂産業には獨協大学のOGが勤務しており、送迎バスの利用等に便宜を図っていただいた。
- ② 三富新田の耕作景観 短冊状の畑地で蔬菜類が栽培されている。(景観観察)
- ③ 多聞院 三富新田の元禄年間に川越藩によって開拓がすすめられた。当時の藩主柳沢吉保によって創建された寺院。
- ④ 木ノ宮地藏堂 多福寺境内の仏堂、内陣の格天井には107枚の植物面が描かれている。隣接して甘藷の碑がある。
- ⑤ 多福寺 多聞院とともに柳沢吉保によって創建された寺院。
- ⑥ サツマイモ農家（早川園） 落ち葉堆肥および圃場を見学。ここでは農家の方からの説明を受けた。

- ⑦ サツマイモ農家・売店（江戸屋弘東園） 踏み込み温床（サツマイモの苗床）見学  
現地解散：(路線バスあり)



写真1 サツマイモ農家での聞き取り

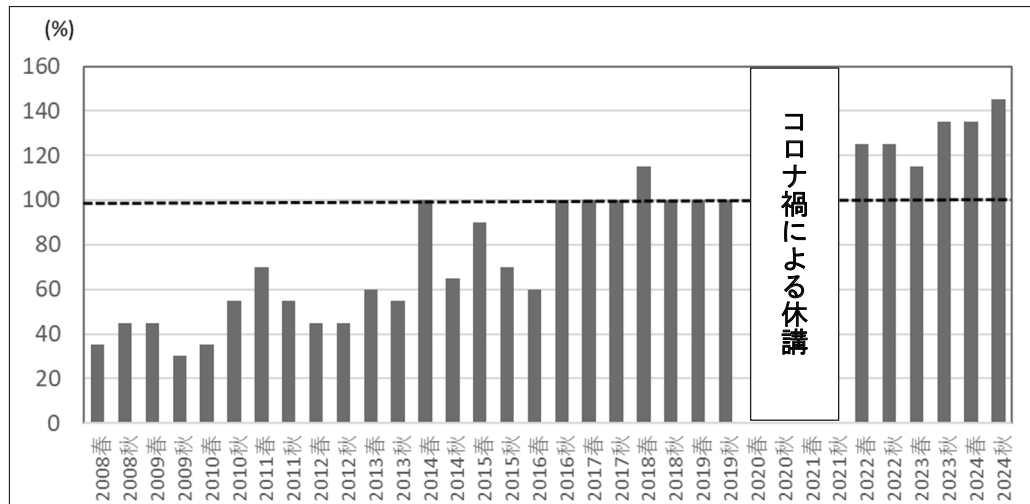
オープンカレッジのフィールドワークでは、大学から離れた場所を対象に行われる。オープンカレッジの特性から時間や場所を柔軟に設定できるという利点があり、このこともまた受講生の評価につながっている。

#### 4. 成果と課題

前述のようにオープンカレッジは受講生が一定数に満たなければ開講されない。また、講座ごとに受講料を徴収していることから、受講者数が受講者の評価を端的に示しているといってもよい。

本講座はフィールドワークを含むこともあって受講者数は約20名に制限しているが、2016年までの定員充足率は約50%程度であった。定員の充足率が高くはな

かった理由の一つが、他の講座との重なりと類推される。2017年度以降、定員充足率は100%を超えるようになった。アンケートによれば当初から受講者の満足度は高く、時間が経つにつれ、その評判が広がったものと考えられる。繰り返し受講を希望する受講者が多く、2022年度以降は申し込み開始日に申込者数が定員を上回るようになった。2022年以降は定員以上の受講生を受け入れている。



第2図 環境共生研究所提供講座の定員充足率（定員は20名）

こうした評価が得られた理由の一つが講義内容にあると考えられる。今日、「街歩き」のテレビ番組は人気があるという。しかしその多くが「食べ歩き」に焦点が置かれている。NHKで放送されていた「プラタモリ」は、単なる食べ歩きではなく、その場所の自然地理や歴史的背景に着目しており、高く評価されている。本講座も、内容的にはそれに近いものがあり、地理や歴史に関心のある受講生からの高い評価につながっているものと考えられる。

オープンカレッジは、大学における教育・研究の成果を市民と共有するために開催されている。学部生に対する授業は、学問体系に沿ったカリキュラムで提供されるため、必ずしも講師が関心を持っている内容について扱えるわけではない。しかし、オープンカレッジではそうした縛りがないため、講師が関心を持っている内容について、直接講義ができる。本講座のコーディネーターを務めてきた秋本、大竹の研究基盤は地

理学にある。地域の事象を具体的に扱っており、一般の社会人にも受け入れやすい内容であったと考えられる。また、環境共生研究所の研究成果を社会に還元する方法として、これまでのところ十分成功しているといえる。

一方、課題もある。環境共生研究所提供講座というものの、内容的には偏りが生じていることである。扱う内容は地理学的視点に偏っており、経済的あるいは法的視点から内容は十分に実施されているとはいえない。つまり、環境共生研究所研究員の幅広い研究成果を公開することにはなっていないのである。今後講座内容の拡大を図っていくことが必要かもしれない。

#### 注

- 1) 全学総合カリキュラム環境学はコーディネーター教員の変更等により若干の変更があるものの、内容的にはこれを踏襲したものになっている。なお、

2024年度秋期の全学総合カリキュラム環境学Ⅱは諸般の事情により閉講になった。

2) 職位等は講座開設時のもの。

3) 秋本は経済学部教授に、大竹は経済学部准教授に昇任した。

**謝辞** 本稿をまとめるにあたってエクステンションセンター職員の協力を得た。また、本講座には繰り返し受講してくださる方が多く、いろいろなご意見をいただいている。記して感謝申し上げたい。

## 文献

秋本弘章(2009) 社会人教育における野外巡検の意義と役割. 環境共生研究(2). pp.20-30.

犬井正(2008) 環境共生研究所開所式所長挨拶. 環境共生研究(1). p.7

犬井正(2017)『エコツーリズム ころも躍る里山の旅』. 丸善出版

獨協大学五十年史編集委員会(2016)『獨協大学五十年史』. 獨協大学

浜本光紹監修 獨協大学環境共生研究所編(2016)『環境学への誘い』. 創成社



**Results and challenges of the open college course  
by Institute of Human and Environmental Symbiosis Research**

AKIMOTO, Hiroaki

Dokkyo University's Institute of Human and Environmental Symbiosis Research was established to conduct investigations and research on environment as well as return the profit of achievements to society and school education. This paper introduces the content of the "Considering the local environment" course that has been offered at the open college, and examines its results and challenges.

